

【序論】

研究動機・研究目的・研究方法・予備的考察

筆者は、秋田大学で定期的に行っている「ボール遊びの集い」において、低学年期の児童と接する機会が多かった。「ボール遊びの集い」に参加している児童たちに限らず、低学年という発達段階において、児童はどのようなボール操作ができる、あるいはできないのか、またその動きにはどのような特徴があるのか。そして、どのようなボール運動を授業として導入することができるのかということに興味をもち、研究したいと考えた。

本研究の目的は、小学校低学年における、ボールを用いた運動のレディネスについて、動き方の本質的特徴の側面から把握し、どのような働きかけによって発達・変容していくのかを明らかにすることである。方法として、秋田大学教育文化学部附属小学校低学年の運動レディネスを調査し、マイネルのモルフォロギー的考察法を中心に、児童の動きを読み取ることを通じて、運動レディネスに応じてどのような働きかけによって子どもの動き方が発達していくのかを考察していく。

本研究を進めるのに先立ち、筆者は、「運動レディネスは、今までの運動経験と関係があるのではないか」という仮説を立てた。そこで、秋田大学附属小学校1年生～3年生の保護者に対して「今までの運動経験に関するアンケート」を実施し、今までにどのような運動をしてきたか、またそれは何歳頃からどこでやっていたかを調査した。調査人数は、全保護者311人中275人(回答率88%)である。アンケートの結果、多くの児童がこれまでに「跳ぶ運動」や「投げる運動」などのいろいろな運動を経験しているが、「捕って投げる運動」や「走りながら投げる運動」などの運動の組合せに関してはまだ経験が浅いようだった。また経験がある児童は、そこには指導者がいることが多いということがわかった(資料1参照)。

【本論】

第一章 モルフォロギーの立場からみた投・捕運動の特性論

本章では、K・マイネルのモルフォロギー的考察法とは何か、また「投げる運動」・「捕る運動」とはどのようなものなのかについて述べている。K・マイネルのモルフォロギー的考察法は、あるスポーツ運動を外から知覚するだけでなく、中から知覚する他者観察の自己観察化が求められる。また、このように観察した運動を本質的なものにするため、①運動の局面構造 ②運動リズム ③運動の伝導 ④運動の流動 ⑤運動の弾性 ⑥運動の先取り ⑦運動の正確さ ⑧運動の調和 という8つの諸カテゴリーを用いる。今回の研究では、「運動の局面構造」、「運動の伝導」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」が重要であると考え、これらのカテゴリーを基にして実際の分析を行った。

「投げる運動」「捕る運動」を広辞苑で調べてみると、「投運動」「捕運動」と表記されている。「投運動」とは「手に持って遠くにほうる」(6.p.1954) ことであり、「捕運動」とは「手に握り持つ」(6.p.1983) ことであると示されている。どちらも「手」による運動

であることが示されているが、実際は手だけではなく、体をひねったり膝を曲げたりするため、全身を使った運動であるといえるのである。

第二章 運動発達論からみた各年齢段階における投・捕運動の発達

この章では、運動発達の意義や、幼児期・園児期、小学校低学年という年齢段階における投・捕運動の発達を、K・マイネルによる一般論を基にして述べている。年齢があがるにつれ、投・捕といった個々の運動のみだったものが、2つ以上の運動を組み合わせることができるようになる。また、今まで行っていた運動の正確性が増していくのである。

第三章 運動発達論からみた投・捕運動の問題点

この章では、運動発達論をふまえたうえで、秋田大学附属小学校の一年生～三年生に、①「利き手の方向からパスを受け、ボールをとってからすぐに目標に向かって投げる」(以後「目標投げ」) ②「5メートル先に置かれたハンドボールのゴールを越すようにボールを投げる」(以後「遠投」) ③「二人一組で20メートルの間に5回パスをし、同様の方法で戻ってくる」(以後「ランパス」) という運動課題を提示し、子どもたちのボール操作を観察した。各項目とも3つに類型化し、その分類したグループから典型例を抽出し、印象分析をした(資料2参照)。次に、児童のレディネスを調査した後、秋田大学附属小学校2年C組において、全7時間の授業の中でどのような下位教材を用いて児童の動きを修正していったのかを調査した(資料3参照)。そして全7回の授業終了後、授業前に行ったものと同じテストを行い、変わっている点はあるかどうかについて考察した(資料4参照)。

【結論】

第一章 小学校低学年における運動の基本形態とその組合せの発達のまとめ

人間は生まれてから、さまざまな活動を経験することによって数多くの運動が発達する。その中の小学校低学年という年齢段階において、どのような運動ができるのかということについて考察してきた。考察の結果、小学校低学年における運動レディネスは、その子どもの発達や運動経験によって大きく異なるため、同じ年齢の子どもであっても、運動発達に大きな差があった。つまり、K・マイネルが述べていた一般論が、一概には言えなくなるということがわかった。そのため、モルフォロギー的考察法によって「何ができて何ができないのか」ということを把握し、授業でどのような動き作りを取り入れればよいかということが明確にしなければならないのである。そして、個々の動き方の違いにも対応できる系統的な指導によって運動を修正し、正しい運動へと導いていく必要がある。

第二章 今後の展望

子どもの発達段階において「何ができて何ができないのか」を把握することは、授業を作っていく上で大変重要なことである。目の前の子どもの運動レディネスによって、さまざまな指導法が考えられるからである。一つ一つの動き作りを授業に取り入れることで、子どもの運動能力は確実に発達する。現場では本研究を生かし、子どもの動きを読み取ることによって運動発達に効果的な指導法を選び、段階的に教えていくことで、運動発達を促す手伝いができるようにしたい。(引用・参考文献省略/資料参照)